

舞踊の記号論的考察（Ⅱ）

石 渕 聡

舞踊を記号論的に考察する際、我々は分別した諸契機に対して等価的に扱うことが義務づけられているはずであるが、その中にダンサーを見いだすとたちまちその困難さに気づく。分析の焦点は、舞踊とダンサーの関係であり、それはダンサーの存在を「身体」とすり替えることによって可能となるものである。舞踊と身体の関係から舞踊の意味の生成について考えるとすれば、一つの方法として解釈の問題を関与させることができる。その際、舞踊を言語的な解釈から考察することは多くの問題を限定する。なぜならば、言語的な意味の形成にも身体が深く関係しているからである。したがって、ここでは言語的契機がどのような形で舞踊の中に介在しているかという問題が考察の中心となる。

まず、舞踊における「身ぶり」を検討する。「身ぶり」は舞踊の言語的に翻訳可能な動作のまとまりであると捉えることが可能であるからである。この場合、舞踊における身ぶりが手話のように明らかな言語的表現を呈していたからといって、それを日常的身ぶりのもつ実用的な機能を備えたものとして捉えるわけにはいかない。舞台上において行われる身ぶりは実用的機能とは別の機能を備えていると考えなければならない。

では、その別の機能とはどのようなものであろうか。それは、一つは舞踊に言語的な意味を伴わせるということであり、一つは、舞踊から言語的な意味の一貫性を剝奪することであると考えることによって、舞踊と言語的契機との関係がうまく説明できるものとなる。例えば、舞踊の中で「倒れる」という場面はよくみられるが、日常においては、「倒れる」という身ぶりは「何かにつまずく」とか「気を失う」というように、その行為の状況を報告している。ところが、舞踊においては、仮に言語に翻訳するならば「倒れる」という内容だけしか表していない。そして、それが、一連の舞踊のつながりの中で行われると言語化されたはずの「倒れる」という内容も消えてしまうのである。その時、なお言語的な内容を伴わせようとするならば、無規定な変換が為されて、例えば、「死」や「悲しみ」であったり、「躍動的」「エネルギー」という内容に変わっていく可能性もある。これが身ぶりの果たす第一の機能である「舞踊に言語的な意味を伴わせる」ということである。

また、舞踊になじみの薄い人が、舞踊を観た後で「何かよく分からない」と言う状況は身ぶりの持つ第二の機能をよく示している。つまり、「分

からない」という事態は、身ぶりの表す意味のつながりを言語で解釈し続けることによって、言語的な意味の一貫性が受け取れなくなったことによるものである。この時、身ぶりは「舞踊の中の言語的な意味の一貫性を剝奪する」という機能を果たしている。舞踊を何度も見ている人は言語による意味の一貫性を解釈の中心に捉えることはしないので別の一貫性を見て取ることができるために「分かる」のである。

以上のことは、意味の生成をめぐって、言語と身体固有の位相を導く。身体と言語の通常の関係は、我々が身体を捉える場合、それは常に言語を介していると考えられる。例えば、「手、足、胴、首、頭」というように、本来不可分であるはずの身体が言語によって分節され、「頭と胴は首でつながる」という一つの言語表現が意味の一貫性を生じている事実それはそれを示している。そして、言語は言語としてのみ意味の一貫性を持つことができるのである。例えば、「頭は足である」という文を挙げてみると、これは主語と述語を備えていて、文として完璧に成立したものである。しかし同時に、現実の身体とは別のある意味を提示していると言える。

ところが、舞踊の中では意味の一貫性に関与することがらが言語と逆転していると捉えることができる。言語は（身ぶりという形で）身体によって舞踊にもたらされるが、それを言語的に解釈した場合、それは意味の通らないものであったり、翻訳不能であったりする。仮に、動作の一つ一つがすべて言語的に解釈可能な身ぶりであるとしても、それらが一連のつながりを為すと、そこには言語が持っている意味のつながりは消失してしまうのである。それは言語が「頭は足である」と表現した際に、現実の身体が提示する意味から離脱していった事態と類似している。今度は身体が自らにまわりついていた言語的な意味から遠ざかっていくのである。そして、身体は言語とは別の一貫性に基づいて、別の意味を提示しはじめる。それは舞踊が身ぶりを伴わず、単なる身体の動きからなっていると思えるようなとき、最もよく現れる。つまり、一連の動きに分節が現れ、それらの分節によって、少なくとも言語とは別の舞踊の意味が形成されるのである。

このように、舞踊に対する言語的契機を考えると、舞踊において言語があくまでも身ぶりという身体の形態をとって介在しており、同時に、（身ぶりという）身体によって言語が解体されていくという構造を捉えることができる。

【主要参考文献】

Umberto Eco, 1976, *A theory of semiotics*, Indiana University Press.